

朝野遠近同帰一乘緇素貴賤必期成佛

— 正 嫡 付 法 —

本園寺報

— 本園寺年譜 —

佛日増輝法輪常轉 第十一号



『開目抄』はその全体が

本門戒壇論述の正書なり

— 弁明・懺悔・鎮魂そして誓願 —

大本山本園寺現燈 早川 日章

はじめに

古来より、その名を残す多くの先学が説く本宗教学に於いては開目抄・観心本尊鈔の両書には、本門戒（壇）は秘匿されていると伝えられ、開目抄については人開頭（の）書と定義づけられてきた。それには肯定すべき点はあれども、今時においては、強く否定しなければならない点が生じている。

実は、『開目抄』を繰り返し読んでいて、更に大変な事に気付いたのである。それを自己内面で反芻する度に、この気付きが『開目抄』解釈において、何か新しい視点を生むのではないかと思慮するに至った次第です。

その気付きとは、宗祖が天の加護の有無を以て、自らを真の法華行者であるかどうかと問うように、筆者もご自身の為に殉死された下藤吉隆と鏡忍坊との死と加護の関係について、宗祖はどのようにお考えなされていたかを尋ねるべきである、ということである。

宗祖は生涯を通じて小松原法難について一、二を除き、殆ど触れることがなかった。加えて、殉死した二人についても寡黙であった。筆者はこうした経緯も含め、宗祖の内面に恐れ多くも対峙せざるを得ないのである。

博學破邪の師 本園寺第二十六祖了義院遺智目達大和尚（二六七四—一七四七）の云へ、「竊祖 松葉谷の草庵の再興あり。此の靈像の釋迦佛を安置して始めて本園寺と号す。釋尊久遠實成最初の弟子本化上行菩薩の再誕（「後身」）日蓮聖人の本尊とする所なれば、本地久成の釋迦佛を以て始めて本尊とす。その本佛の住所なるを以て、此の處、即是、本地常住の妙園なり。天台の所謂本園寺妙と釋せるは、是れなり。故に本園寺と号す。是れ我宗旨（寺号）を立るの最初なり（取意と）。

本園寺に学道あり、是れ大聖人の始めしもの、次で求法講院あり、此れ日重上人の始めしもの、今時、之れが再興なれり。
*我が法主の教たる也、要路を開示す。所謂、戒定慧、是れなり。此の三は猶衣・食・住の（三）とし。聊か、仏性常住の（宗旨）を觀じ、俯察して学の（精要）を扶けん。

京阪京津線地下鉄東西線御陵駅下車、徒歩12分。京阪バス御陵下車、徒歩12分。吾祖の風光に寂照される為に登詣して下さい!!

宗祖は本抄中盤に至るまで、ご自身の折伏活動の正当なることを実に克明に、かつ緻密に弁明された。それは宗祖の信念が「戒においては大小殊なれども釈尊を本とす」（『法門可被申様之事』）ゆえの、厳しい克己心に満ちており、その実践たるや法華最勝を地でゆく色説であったので、王難に遭って落胆の淵に在つてもなお、あらゆる面での正当性は本鈔において完全に確保されたと拝するのである。

かくて、宗祖はその成果を踏まえた上で、内心に抱えてきた鬱積する大いなる疑念を晴らすべく、謙虚にご自身に焦点を当てられたのである。

「世間の疑といひ、自心の疑と申、いかでか天扶給さるらん。諸天等の守護神は仏前の御誓言あり。法華經の行者には猿なりとも法華經の行者と号して早に仏前の御誓言をとげんとこそ覺すべきに、其の義なきは我が身法華經の行者にあらざるか。此の疑いは此の書の肝心、一期の大事なれば、処々にこれをか上、疑を強くして答えをかまうべし。」

『開目抄』 池上朝夕諷誦 三〇五頁

と、天に対して究極の疑義を発せられる。宗祖がそうあらば、恐らく読者の関心も宗祖が向かう方向に向かう、筆者も同様であった。ところが、ふと、筆者は宗祖に対して何故、ご自身のみの天（守護神）の扶けに固執なされるのか、と問い掛けたくなったのである。神のご加護を願うのは宗祖お一人だけでない筈、言うなれば法華信者全員も同様の思いではないか。しかも、宗祖の御身を守らんが為に殉死された人がいたではないか。その二人について、宗祖はどのように思われ、どのような扱いをなされてこられたのかと。ここに至つて益々、宗祖の内面に一步でも近づきたいと思つたのである。

宗祖の孤高の弁明

『開目抄』は宗祖の法華經の確信に基づく半生の言動の概要が包み隠さず述べられている。筆者はそのすべてが本門戒（壇）を示されたものと受け止める。なぜな

らば、法華経の本門の戒・定・慧を体现されようとした宗祖の言動、それ以外の何処に、又如何なる經典に本門戒（壇）が有るというのか、と確信するからである。

本抄の中盤までは正に法華の理論と行動に対する弁明である。そこでは龍口法難に窮まり、法華経を投げ捨て、廻転した者達を強く責める。それは宗祖の信念がもたらすものである。ところで、筆者の前述の気づきとは、法華経と宗祖の為に功労を積んだ人々、端的に言えば、小松原法難で殉死した工藤吉隆と鏡忍坊へのねぎらいや感謝の言葉はあったのであろうか、である。

「結句は法門はかなわずして、よせてたたかいにし候也。念仏者は数千万、かたうど多候也。日蓮は唯一人、かたうどは一人もこれなし。今までもいきて候はふかしぎ也。今年も十一月十一日、安房国東条松原と申大路にして申酉の時、数百人の念仏等にまちかけられて候て、日蓮は唯一人、十人ばかり、ものの要にあうものはわずかに三、四人也。いるやは、ふるあめのごとし、うつたちは、いなすまのごとし。弟子一人は当座にうちとられ、二人は大事のてにて候。自身もきられ、打れ、結句にて候し程にいか候けん、うちもらされていままていきてはべり。いよいよ法華経こそ信心まさり候え。（中略）されば日本国の持経者はいまだ此経文にはあわせ給わず。唯日蓮一人こそよみはべれ。『我不愛身命、但惜無上道』是也。されば日蓮は日本第一の法華経の行者也。もしさきにたせ給わば、梵天・帝釈・四大天王・閻魔大王にも申させ給べし。日本第一の法華経の行者日蓮房の弟子也、とならせ給え。よもほうしんなき事は候わじ。」（文永元年十二月十三日 宗祖四十三歳）

『南条兵衛七郎殿御書』 池上朝夕諷誦 二〇三頁

この書は宗祖が小松原（法難）と題して述べた唯一の書である。書かれた日付は一カ月後であり、宗祖が負った頭部の傷が癒える頃であろうか。文面中で注目すべき事は修羅場に登場した筈の東條景信、傷を負った乗観房、長英房、殊に殉教した工藤吉隆、鏡忍房等の実名を全く上げず、また殉教二人に対する追悼或いは供養の辞も無いことである。反面際立つことは、二人の弟子を殺され、自分も傷を負ったというこの事件を、法華経が示す刀杖の難を経たことを我が手柄と挙げ、結局、我こそは日本第一の法華経の行者であるぞ、との強弁である。加えて、若し死ねば、閻魔大王等に日本第一の日蓮の弟子であると名乗りなさいと指示されているのである。こうした論法には、宗教家の自らを將軍に譬えて、一將功成りて万骨枯るの如き、俗界での血生臭い争いを仏教界に持ち込むような雰囲気さえ漂う。折伏の戦場

で明け暮れる宗祖であっても、このような誤解が生じてよいのか、という思いは偏に筆者だけの杞憂ではないと思慮する。

「又聖人は言をかざらずと申。又いまだ頭れざる後をしるを聖人と申か。日蓮は聖人の一分にあたれり。此法門のゆえに二十余所おわれ、結句流罪に及、身に多くのきずをおほり、弟子をあまた殺せり。比干にもこえ、伍しそにもおとらず。提婆菩薩の外道（に）殺（され）獅子尊者の壇弥利王に頸をはねられしにもおとるべきか。もししからば八幡大菩薩は日蓮が頂をはなれさせ給ては、いずれの人の頂にかすみ給わん。日蓮を此国に用ずばいかんがすべき、となげかれ候なりと申。」（文永六年四十八歳）

『法門可被申様之事』 池上朝夕諷誦 二四四頁

三位房を指導するために出されたこの書は、云うべき事を言う為か、少しく強い語調で書かれている。文中に小松原を指し示す事件が明かされている。「身に多くのきずをおほり、弟子をあまた殺せり」がそれである。法華経を弘めようとした為に、二十余回も住む所を追われ、伊豆に流罪を受け、多くの難で体に傷を受け、小松原では弟子二人を殺してしまった。一連の法難の悲惨さは提婆菩薩、獅子尊者二人のそれぞれの悲劇に比較してもそれらを越えていると、宗祖は強調される。しかし、筆者は恐れ多くも、いずれも殺人が絡まるこれらの事件を比較することに少しく疑問を感じる。それは、故意の死はいつも限りなく悲惨であり、死の比較は亡き人への冒流になるからである。果たして、宗祖はどのような気持ちで自らが関与した事件を他と比較されたのか。

宗祖は続けて、ゆえに八幡大菩薩は日蓮が頭上に住み、加えて、この日蓮を日本国が用いなければ、如何すべきかと歎かれるであろうと、八幡大菩薩の絶対的な加護の有る事を断言される。こうした宣明は、法華経を虎の威としていると誤解をされても仕方が無い程に縦横無尽である。筆者は宗祖には何か、深い計らいがあると考えている。では、それは一体どのような想いであろうか。

ともかく、『立正安国論』を幕府に献上以後の約十年間、宗祖は右引用文に見られるように、「日蓮は日本第一の法華経の行者也。」という自意識の塊（かたまり）であって、他の人々の心情を思いやる事が非常に少なく、何事も論理的に処理する嫌いがあったと言われる。引用の二鈔を見ても、大いに領けることであろう。筆者はこうした状況を宗祖の孤高の弁明と呼びたい。唯一人という意識の下では、正統派たる二途な正義の主張が凡てに優先するのであろうか。

法華信仰と前世の業

本抄後半に、宗祖は自身の前世の業を描き、天の加護無きの一因に上げられる。然し、本鈔執筆の最中若しくは同時期の手紙に書かれる内容と自語相違が有るように思われる。その為、宗祖の前世の告白には何か含みがあるのではないかと思考される。

「所詮臨終只今にありと解て、信心を致して南無妙法蓮華經と唱る人を「是人命終為千仏授手令不恐怖不隨惠趣」と説かれて候。悦しい哉一仏二仏に非ず百仏二百仏に非ず千仏まで来迎し手を取り給わん事、歡喜の感涙押え難し。(中略) 今日蓮が弟子檀那等、南無妙法蓮華經と唱ん程の者は、千仏の手を授け給わん事、譬は蓮夕顔の手を出すが如くと思食せ。過去に血縁強盛なる故に、現在に此經を受持す。未来に仏果を成就せん事疑い有るべからず。過去の生死、現在の生死、未来の生死、三世の生死に法華經を離れ切れざるを法華經の血脈相承とは云う也。」

文永九年二月十一日『生死一大事血脈鈔』 宗祖五十一歳 塚原

(池上朝夕諷誦 二百八十二頁)

この書は最蓮房の質問に答えた手紙で、生死一大事の血脈とは如何なるものかについて述べられている。文中、宗祖は法華經を受持する者は過去(前世)に血縁強盛なる故で、それは未来まで続くと述べる。つまり、現世で法華經を信ずる人は既に過去(前世)において強い縁(絆)を持った者であると限定し、来世の仏果の成就(成仏)までを確言する。

この宗祖の説について鑑みるに、現世で法華經を受持する者の前世は、一、人間界であり、二、そこで五戒を破るあるいは謗法を犯すなどの歴が無く、三、かつ法華經を信持したという三つの条件を全て備えていなければならないことが分かる。

仏教は伝統的に時間論として過去(已)・現在(今)・未来(当)の概念を設け三世とする。宗祖の法華經論からすれば、今に説かれた法華經が最重要であり、そこに説かれる釈尊は時間を超越する無始無終の永遠の本仏である。この三世観は、輪廻あるいは業を問題とするが、宗祖は十界互具に業論を絡ませて法華經を説いている。右引用をみる限り、前世に破戒や謗法を犯した者は現世には六道に落ちるから、人間界に戻ることは出来無い筈である。謗法罪を犯し地獄に落ちた者は相当期間の過酷な修行が待っている。これが宗祖の持論であり、戒法ではなからうか。

「事の心を案ずるに(一) 前生に法華經誹謗の罪なきもの。今生に法華經を行ず。これを世間の失に寄せ、或は罪なきを怨すれば、忽ち現罰あるか。修羅が帝釈を射る、金翅鳥の阿耨池に入る等、必ず返って一時に損するが如し。」

(宗祖五十一歳 塚原)

『開目抄』 池上朝夕諷誦 三百四十三頁

正に、宗祖は前世に謗法の罪無き者こそ、現世で法華經を行ずることができると確言されるのである。ここでは、前世の謗法のみを採り上げている。

三大誓願がここで述べられる。

(文脈の位置に)注意。以下の私論の理解のため)

「疑云く、いかんとして汝が流罪・死罪等、過去の宿習としらん。答云、銅鏡は色形を顕す。秦王駿偽の鏡は現在の罪を顕す。仏法の鏡は過去の業因を現す。般泥洹經云く「善男子、過去に曾て無量の諸罪、種種の惡業を作る。此の諸の罪報は或は輕易せられ、或は形状醜陋、衣服足らず、飲食餓凍、財を求むるに利あらず、貧賤の家・邪見の家に生れ、或は王難に遭い、及び余の種種の人間の苦報あらん、現世に軽く受くるは斯れ護法の功德力に由るが故なり」等云々。」

『開目抄』 宗祖五十一歳 塚原 (池上朝夕諷誦 三百四十五頁)

この一文は宗祖のひたむきな三大誓願に直接連なる文である。もしも、三大誓願が三徳具備の宣言であるとする、間断無く続くこの懺悔文の行間に割り込んだ形であるので、天と地のような異和感を生じ、何人も理解不能に陥るであろう。片や本仏の徳を備えた菩薩と、片や無量の罪を犯したと言ひ張る者が同一人であると誰が信じ得ようか。これに反して、清明に誓願する宗祖と心からの懺悔を為そうとされる宗祖とは同一の宗祖であることが明瞭に理解されるであろう。

さて、この引用文を要約すると、前世の宿習は仏法の鏡に映る。それに依つて、わが流罪・死罪等が過去の宿習であると判明したのである。しかも、般泥洹經には「過去に於いて作られた惡業により、現世では様々な苦しみを受けるが、護法に努力する者は軽く受けるのである」と説かれている、となろう。

この文中にある仏法の鏡とは一体どういう物であろうか。現代に生きる我々の思考と、あの時代に躍動された宗祖、その時代を生きた人々の思考とは噛み合わない

こともある。この仏法の鏡のことは多分その内のひとつであろう。唯、現代の立場から言えることは、仏法の鏡に映ることは、すべて推定か断定かの誤差であり、そこに信心が係わっているということではなからうか。

前引用文に続く文を見よう。

「此の経文、日蓮が身に宛も符契のごとし。孤疑氷とけぬ。千万の難由なし。一一の句我が身にあわせん。『或被輕易』等云々。法華経に云『輕賤憎嫉』等云々。二十余年が間の輕慢せらる。『或は形状醜陋』。又云『衣服不足』。予身也。『飲食饑疎』。予身也。『求財不利』。予身也。『生貧賤家』。予身也。『或遭王難』等。此経文、人疑べしや。」『開目抄』 宗祖五十一歳 塚原

(池上朝夕諷誦 三百四十五頁)

前文中の般泥洹経に宗祖は身を宛てて解釈し、いよいよ自身の懺悔の用意を調える。生まれてから半世紀、弘法実践の激動の五十路。所追われ、徒に曠野に捨てられ、敗残の身になり果てた。いまや裸の自身を省みるのみ。此処にたつた一人で坐す人間は果たして一体、何者なのか。願いは国の為、ひとのためと人の世の欲望の一切を断ち、信じる法華経のみを掲げ、戦い抜いたにも係わらず、国政に受け入れられず、多くの民に仇まれ、処刑の座に坐らされ、挙げ句の流罪。親しき弟子、檀那とも引き離され、孤島の死人捨て場にひとり打ち捨てられ、雪と氷と寒風に飲み込まれ、冷たい体になりにかける現実の己れ。——この時の宗祖のお姿を思うと実に胸塞がる想いがする。

懺悔

「我無始よりこのかた、惡王と生て、法華経の行者の衣食田畠等を奪とりせしことかずしらず。当世日本国の諸人の法華経の山寺をたうすがごとし。亦法華経の行者の頸を刎こと其数をしらず。此等の重罪はたせるもあり、いまだはたさざるもあるらん。果も余残いまだつきず。生死を離時は必此重罪をけしはてて出離すべし。功德は淺軽なり。此等の罪は深重なり。權経を行ぜしには此の重罪いまだおこらず。鉄を熱に、いとくきたわさればきず隠てみえず。度々せむればきずあらわる。麻子をしぼるにつよくせめざれば油少がごとし。今ま日蓮強盛に国土の謗法を責れば大難の来は過去の重罪の今生の護法に招出せるなるべし。」『開目抄』 宗祖五十一歳 塚原

(池上朝夕諷誦 三百四十六頁)

文意を要約すると以下となる。惡王となつて犯した重罪の償いを全部果たそうと努力したが、出来たことと、未だ出来ないことがある。出来るならば、死ぬまでに償いをすべて果たし、出離したいものだ。今、国中の謗法を呵責した為に流罪されているが、これは過去の重罪を今生の護法の功德が招き出したためである。

宗祖が述べる前世は、驚くべき惡業の数々に満ち、犯した重罪の累積は即、一聞堤として処断されるべきで、正に、墮地獄、無間地獄行ききの沙汰である。何故、宗祖はこのような極惡の身に自らを貶めようとなさるのか。現世での受けた法難の数々に精神を病み、追い詰められて、自身の前世をこのように推定せざるを得なかったのだから。或いは、その重圧が高じ、このように断定的になつて仕舞われたのか。いずれにしても、余りに極端で意図的でもある。この宗祖の心情を伺うに、幾つかのおおまかな汲み取りが考えられる。

- (一) 自己の前世を確信して惡王を立てた
- (二) 架空の話を参考にして惡王を立てた
- (三) 自身が関わる事件から惡王を立てた

この三通りをみれば、(三)が最適であることは論を俟たない。現世における事柄を問題に据えながら、現世に起きた事件とは全く関係の無い、荒唐無稽な話を持ち出すことは有り得ない。宗祖は無意識の内に、ご自身が深く関わり、自らも深い傷を負った小松原の惨劇を、前世に宛て込み、東条景信をご自分に振り替え、惡王を立てたように考えられる。一連のこの振り替えは、宗祖の内心におけるごく自然のなりゆきからで、推察による前世に対し、経験上の現世が重みを増したとも言えるのである。

ところで、弟子の鏡忍坊、檀越の工藤吉隆の二人を殺した犯人は紛れもない東条景信であるが、文永六年の『法門可被申様之事』の書状には「身に多くのきずをおぼり、弟子あまた殺せり」と述べられている。宗祖は既に、景信に殺された責任は自分であり、結局は自分が殺したに等しいとの強い意識を心底に形成していたことが明らかに伺える。たとえ、宗祖にどのような対外的な考えや事情があったとしても、心の深層に刻まれた悲しい痛みは覆い隠せるもので無い。この書状の宗祖は自分こそ国の役に立つ行者であることを主張し、心はそちらにあるにも拘わらず、不意に出る言葉は内心を写しだしている。自分が殺したとの言辭はその好例かも知れない。こうした経緯を踏まえれば、宗祖が自らを貶めてでも、惡業の数々を犯した惡王が前世の自分であつたと述べた理由が理解される。

ところで、この小論の最初に引用した両書状では、宗祖は小松原法難で殉死した二人に対し、慰霊の言葉や供養の誠の念が薄く、書状に書くことが殆ど無いこと、返って一将功成りて万骨枯る如きであること等を指摘し、決してそのような宗祖で在るはずが無いと訝しく感じたのであった。いま、開目抄の終盤にきて、この宗祖の前世の業に依る罪の意識に接し、加えて、懺悔の念の深きを押して、立正安国論の国家諫曉以来の宗祖が維持し続けられた剛情な姿勢とお心の奥との狭間がいささか判明したように思われる。

小松原の法難は、宗祖に取っては両刃の剣となっていたのではなかったか。真の法華行者には刀杖の難が必ずあるという一方で、天の守護のみならず陀羅尼品で誓言した諸菩薩・諸神祇等の外護があるとする、法華経には二律背反とも思える思想が謳われている。小松原法難はそれが現実となった典型的な事件であったのである。

宗祖は法華経に説く三類の怨敵を、浄土・真言・禅等の狂信した民衆による不当な暴力での指弾、あるいは讒奏による幕府国権の有無を言わせぬ不法な弾圧に、怨敵の实在を痛切に感じたであろう。身に迫る危険を感じれば感じるほど切実に、八幡大菩薩を始めとする日本守護の善神の守護および法華経守護の諸天・菩薩等の御加護を待んだのであった。しかし、そのけしきは無かった。

「仏は小指を提婆にやぶられ、九横の大難に値給。此は法華経の行者にあらずや。不軽菩薩一乗の行者といわれまじきか。目連は竹杖に殺る。法華経記別の後なり。付法蔵の第十四提婆菩薩・第二十五の獅子尊者の二人は人に殺ぬ。此等は法華経の行者にはあらざるか。」〔開目抄〕 宗祖五十一歳 塚原

（池上朝夕諷誦 三百四十三頁）

「詮ずるところは、上品の一闍堤の人になりぬれば、順次生に必無間地獄に墮べきゆえに現罰なし。令せば夏の桀・殷の紂の世には天変なし。重科有て必、世ほろぶべきゆえか。又守護神此国をすつるゆえに現罰なきか。謗法の世をば守護神すて去、諸天まほるべからず。かるがゆえに正法を行ものにしろしなし。還て大難に値べし。金光明経云、「善業を修する物は日々に衰滅す」等云々。悪国悪時これなり。具には立正安国論にかんがえたるがごとし。」

（池上朝夕諷誦 三百四十五頁）

そこで、天の守護の無い原因を探り、三種類を挙げ、宗祖はご自身を納得させたのである。しかし、そのすべては十界互具の無始の命の連続性に支えられるものであり、法華行者の死と死後に触れるものでは無い。引用文中の人に殺された提婆菩薩

と獅子尊者、本仏から記別を与えられ、近い将来に仏に成る筈の木連尊者の悲惨な横死について宗祖の想いは語られていない。釈尊の場合はどうであったのか。

「聖なる二人のまな弟子に対する仏陀の追憶はつきない。師に先立つて逝った仏弟子への追憶は悟れる聖者の胸にも悲しくせつないものであられたに違いない。寂然とした瞑想の中に亡き仏弟子を祈る釈尊の姿に、付き添う多くの比丘衆は、耐え難い老境のいたいたしさを拝したのである。（注 まな弟子とは目連と舍利弗のこと）

すべてのものは無常なり わがものにあらざると

これ 無明を除くのすべ 知見を清むるの道なり

おこたりを いましめ いそしみて

おのれの 燈となるべし

智と戒をおさめ 不死の法座に やすらぎを得ん

（本園寺第六十三世 伊藤日瑞著）

しかしこの後、宗祖は亡き二人の覚悟を称え、その冥福を祈ろうとされる。それは自らの深い懺悔の中から自然に湧き上がる清らかなものであり、そして何よりも、宗祖自身が新しい宗祖・日蓮聖人へと一大転回があったと拝察する以外に想像がつかない。兎に角前世に悪王を立てて自らを最低に貶めたことがこの転機へと宗祖を導いたのであろう。

供養

「涅槃経云「譬えば貧女の如し。家に居して救護の者有ること無く、加うるに復病苦飢渴に逼められて遊行乞丐す。田の客舎に止り寄りて一子を生ず。是の客舎の主、驅逐して去らしむ。其の産して未だ久しからず。是の児を携抱して他国に至らんと欲し、その中路於て悪風雨に遭いて寒苦並び至り、多く蚊虻・蜂蟻・毒虫の啖食う所と為る。恒河に逕由し児を抱きて度る。其の水漂疾なれども而も放ち捨てず。是に於て母子遂に俱に没しぬ。是の如き女人、慈念の功德、命終の後、梵天に生ず。文殊師利、若し善男子有りて正法を護らんと欲せば、彼の貧女の恒河に有りて、子を愛念するが為に身命を捨つるが如くせよ。善男子、護法の菩薩も亦此に是の如くなるべし。寧ろ身命を捨てよ。是の如き人、解脱を求めずと雖も、解脱自ら至ること、彼の貧女の梵天を求めず

とも、梵天に至るが如し。」等云々。此経文は章安大師三障をもつて釈し給えり。其を見るべし。』《開目抄》 宗祖五十一歳 塚原

(池上朝夕諷誦 三百四十六頁)

宗祖は涅槃經(般泥洹經)を頼みとして引用が極端に多い。本鈔にも随分引用されているが、開目抄の結論部分にこの貧女の説話を取り出したことには特別の想いがあつたであらう。この説話はこの後の結語に直結するものである。

貧女の説話は読んでの通りである。慈念の功德により命終の後、梵天に生じたという。もしも貧女が身ごもらせられることなく、子を産まなかった場合はどうということになったのか、説話に残るが。それはさておき、最後に驚くような論しが述べられる。「善男子、護法の菩薩も亦応に是の如くなるべし。寧ろ身命を捨てよ。」である。この一行に、宗祖がこの説話を引用した理由を強く感じる。宗祖は護法の為に命を奪われた小松原法難の二人と、ここにおいて直結され、不惜身命の誠心とその勇気を称え、追悼されたのである。筆者はその一行の文裡をそのように確信を持って拝する。

身命を捨てよ、とは人間の行動でこれ以上無い、究極の行動を促す言葉である。中途半端な心根では為し得ない決起を意味し、また目的とするところは崇高極まりないものでなければならぬ。一切衆生喜見菩薩の捨身供養の願いはいずこにあつたのか。限りあるこの命を賭して、生きる目的を何処に求めるのか。

宗祖は想う。このわたしの情熱、私が吐く言葉を信じ、弟子となった力自慢の鏡忍坊、妻が妊つたばかりの工藤吉隆殿。ふたりにはそれぞれの天空、新鮮な空氣、喉を潤す清流に木々を吹き抜ける青い風・・・人生を彩るあらゆるもの、すべてが輝く未来があつた。

「我並我弟子、諸難ありとも疑心なくば、自然に仏界にいたるべし。天の加護なき事を疑わされ。現世の安穩ならざる事をなげかされ。我弟子朝夕教しかども、疑をおこして皆すてけん。つたなき者のならいは、約束せし事をまことの時わするなるべし。妻子を不便とおもふゆえ、現身にわかれん事をなげくらん。多生曠劫にしたしみし妻子には、心とはなれしか。仏道のためにはなれしか。いつも同わかれなるべし。我法華經の信心をやぶらずして、靈山にまいりて返てみちびけかし。」《開目抄》 宗祖五十一歳 塚原

(池上朝夕諷誦 三百四十七頁)

我と我が弟子たち、たとえどのような災難が押し寄せて来ても、法華經を寸分も疑わなければ自然に仏界に行けるであらう。諸天善神の加護が無いからといって、

神を疑つてはいけない。現在が安穩でないからと徒に嘆いてはいけない。(中略)別れ難い妻子とはいえ、きつぱりと別れ、法華經に命を捧げ、靈山に行かれた後に、妻子を救おうとしないさい。

文意はこのようであるが、内容は少し不自然な気がする。出家を要請する文ならばこれでよいかもしれないが、一般人に対しては、家にいて学び、妻子に教え、導けばよいのではないか、とも考えられる。しかし、宗祖はこの厳しい指南の言葉をなぜ続けるのか。

筆者は宗祖は亡きふたり、殊に工藤吉隆殿を意識され、別れを強調する書き方を撰ばれたのではないかと考える。心とはなれしか、とはどのような障碍が出来ても力を合わせて乗り越えて行くことが夫婦の絆であらうということ。在家信者に出家をせよ、とは言える筈がない。しかし、亡き工藤吉隆殿の身に代われば、夫婦の絆を切つて法華經に身を捧げた、という称えた言葉に変換されて、返つて適切な追悼の辞となる。

宗祖は貧女の譬えで、寧ろ身命を捨てよ、信心をやぶらずして靈山へ、という激しく、厳しい指南をされ、続く者達の奮起を促す。これも殉死した靈魂が立派な先達であつたというお墨付けとなり、熱いねざらいつと追悼の言葉に成つていと思ふ。

「天の加護なき事を疑わされ。現世の安穩ならざる事をなげかされ」の一文は宗祖のこころの進展を示す極めて重要な記述である。本鈔の肝心として挙げた天の加護の無いことへの切実な追求は結論が出た。原因の一つにしたご自身の前世の業に、己れを悪王に見立てることが、思いがけない心境の変化を産んだ。いま見たように、靈山に行かれた後に、妻子を救おうしないさい、身命を捨てよ、信心をやぶらずして靈山へなどと、聖祖流の整然たる文脈のその裡に込める意志で、殉教したふたりに対する励ましと感謝と哀悼の誠意とを表明できたのである。振り返れば、宗祖は前世の業において身を貶めたことにより、人格上の徳を呼び戻すことが出来たものと拝するのである。

(続いて、本鈔には撰受・折伏論、最終結論が論述されているが、教学上、余論即ち付け足しとされる。しかし、筆者はそれらが本鈔中の最重要の部分と考えている。この小論の目的とずれる撰受・折伏論は割愛させていただきます。後日の拙論にて本門戒壇の核心として解釈論を提示する予定です。)

結 論

「法華經の宝塔品を拝見するに、釈迦・多宝・十方分身の諸仏の来集はなに心ぞ、〔令法久住、故来至此〕等云々。三仏の、未来に法華經を弘て、未来の一切の仏子にあたえんとおぼしめす御心の中をすいするに、父母の一子の夫に値を見るよりも強盛こそみえたるを、法然いたわしとおもわで、末法には法華經の門を堅く閉て人を入じとせき、狂児をたばらかして宝をすつるに、法華經を抛させける心こそ無慚に見え候え。我父母を人の殺に父母につげざるべしや。惡子の醉狂して殺をせいせざるべしや。惡人寺塔に火を放せいせざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禪と念佛者とをみて、せいせざる者はかくのごとし。〔無慈詐親、是彼怨〕等云々。

日蓮は日本国の諸人にしたし父母也。一切の天台宗の人は彼等が大怨敵なり。〔以彼除惡、即是彼親〕等云々。無道心の者、生死をはなる事はなきなり。教主釈尊の一切の外道に大惡人と罵詈せられさせ給い天台大師の南北並に得一に「三寸の舌もて五尺の身をたつ」と、伝教大師の南京の諸人に「最澄未だ唐都を見ず」等といわれさせ給し、皆法華經のゆえなればはぢならず。愚人にほめられたるは第一のはぢなり。日蓮が御勘氣をかうれば、天台・真言の法師等悦くやおもうらん。かつはむさんなり、かつはきかいなり。夫釈尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、伝教支那に入。提婆・獅子は身をすつ。葉王は臂をやく。上宮は手の皮をはぐ。釈迦菩薩は肉をうる。樂法は骨を筆とす。天台云「適時而已」等云々。仏法は時によるべし。日蓮が流罪今生小苦なればなげかしからず。後生には大樂をうくべければ大に悦し。

この結論の部分は概ね本鈔で意を尽くされた思想の再確認である。法華經の宝塔品に釈迦・多宝・十方分身の諸仏が来集されたのは末法未来までも法華經を定着させる為で、この三仏が法華經を弘めて、一切の仏子等にこれを与えんとされたお心は、大きな苦しみに悩む子を思う父母にも越える思いを持たれたからである。以下、法然の念仏、真言宗、加えて今の天台宗を改めて強く批判する。宗祖が流罪を受けたことを彼等は随分喜んでであろう。その他厳しい批判をして結語に向かう。

釈尊・羅什三蔵・伝教大師・提婆菩薩・獅子菩薩・葉王菩薩・上宮聖德太子・釈迦菩薩・樂法梵志等の法華經に尽くされた具体例を挙げ、これらは天台大師の

「時の宜しきに適う」ものであったと称えた。そして本鈔を次の言葉で結ぶ。
「日蓮が流罪は今生の小苦なれば嘆かはしからず。後生には大樂をうくべければ大いに悦し。」

大聖宗祖のこの結語は大きな意義を持つ。不屈の魂魄で臨んだ机上である。目的とした折伏の論の正当性は真摯で論理的な弁明により完璧に確保された。その確信の上で、諸天の加護無きを本鈔の肝心な課題と挙げ、真の理由を探った。そこで自身の前世の業と向き合うが、その業たるや自身の現世の業と重なり、遂に殉教二人の追悼を思い立つ。

「鳥と虫とは鳴けどもなみだおちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。」と『観心本尊鈔』執筆直後の書状で述べられたる「なみだ」は一体何に起因する涙なのか。筆者は今まではさまざまな苦しい体験がもたらすものであろうと、漠然と受け止めていた。然し、本鈔における宗祖の日蓮流の厳しい姿勢・論述の裡に流れる深い思い、その涙の一部に触れさせて戴き、ひたすら刮目し感銘するのみであった。大難四ヶ度、小難数知れずと身を飾るのでなく、これらを小苦と言う。いまや、悠々たる度量を併せ持つ。それは上行菩薩の応現たる素養であるかも知れない。

天の加護を徒に恃まず、氣にも掛けない。広大なみ仏の慈悲にお任せし、未来は大樂ありと信解する大らかさ。宗祖の新境地。結語はそれを表明している。

宗祖のこの結語はいまや、ころろの中の鎧甲を脱ぎ捨て、しなやかで不動の新たな宗祖の誕生を如実に示す。決して法戦の勇氣と準備とを捨てたのでは無い。その勇氣と準備とは本門の戒（壇）を明確に示した今や、題目と本尊を開出し、三大秘法を揃い踏みさせるためである。

かくして宗祖は此の『開目抄』の執筆により、法華經の理論的な解釈により法戦の正当性を確保する一方で、ご自身の内面の深化を得て、あらたにご自身と邂逅され、上行菩薩の応現たる素養を涵養なされ、安心立命の境に入りえたことにより、『観心本尊鈔』執筆に入る準備を整えられたのである。

(この項完)

*本稿は『本園寺報』第11号より転載したものです。

